

# 浄瑠璃本の補修について

——宇治加賀掾正本『舍利』を中心として——

土井 順 一

宇治加賀掾の正本『舍利』は、長い間東洋文庫（岩崎文庫）本が、天下の孤本とされていた<sup>①</sup>。同書は、高野斑山、黒木勘藏校訂『近松門左衛門全集』第十卷（春陽堂、大正十三年一月刊）、及び、藤井紫影校註『近松全集』第一卷（朝日新聞社、大正十四年六月刊）に底本として用いられている。

この東洋文庫本は、後述する書誌から知られるように刊年の記載がない。従って、刊年については問題があり、藤井博士も『近松全集』第一巻の解題で、登場人物である俊苅の四百五十年忌が延宝五年であるところから、この年を刊年として推定されていた。

ところで、刊年の問題は、信多純一氏がもう一本紹介されたことによって解決された。信多氏は「宇治加賀掾年譜補正」において、次のように述べておられる。

天和三年（一六八三年）四十九歳

○五月吉日、山本九兵衛より「舍利」五段を上梓す。

本書の刊年を延宝期の段物集に記載のないところから、貞享初年の作と推定しておいたが、刊年記入りの正

本が出た。前島春三氏旧蔵の八行本で、元題簽も存し、卷末に「天和三<sup>三</sup>歳仲夏吉日」とある。

右に「貞享初年の作と推定しておいた」とあるのは、信多氏が「宇治加賀掾年譜」の「貞享年間」の条において述べておられたことをさすのである。

さて、前島春三氏旧蔵本は、信多純一氏から、現在天理図書館に所蔵されていることをご教示頂いた。この新出の天理図書館本と東洋文庫本とを照合してみると、東洋文庫本は、天理図書館本を大幅に補修した後修本であったことが知られた。

そこで、本稿では、その補修の実態について紹介したいと思う。

## 二

まず、両書の書誌を記しておく。

### 天理図書館本

装幀、半紙本。二二・九糎×一六・七糎。原装。

表紙、元表紙。江戸茶色麻葉繫胡蝶空押模様。

題簽、表紙中央に「舍利加賀掾直傳全」とある。一七・四糎×三・七糎。元題簽。

字高、一九・五糎。

内題、「舍利」。

所屬、宇治加賀掾。

段数、五段。「第二…第五」と、各段ははじめの上部にある。

刊記、第五十五丁裏の最終行に、「天和三<sup>癸亥</sup>歳仲夏吉日」とある。また後表紙裏に次のようにある。

「右此本者依小子之懇望附秘蜜

音節自遂校合令開版者也

加賀掾（壺印）（朱印）

二条通寺町西へ入町

山本九兵衛刊（朱印）

板元、山本九兵衛。

丁数、五十五丁。

丁付、なし。

行数、八行。

板心、なし。

挿絵、なし。

備考、初丁表に、「奥田蔵書」（陽刻方形朱印）、「松更」（陽刻方形朱印）の印記がある。各段はじめに次の墨書がある。「扱其後」（第二）、「去程に」（第三）、「かくて其後」（第四）、「去間」（第五）。詞章や曲節を朱及び墨で訂正した部分があり、語りに用いられたことが窺われる。

東洋文庫本

装幀、半紙本。二一・六糎×一六・二糎。改装。

表紙、元表紙。江戸茶色無地。後表紙欠。

題簽、表紙中央に「舍利直加賀傳全」とある。一七・五糎×三・九糎。元題簽。

字高、一九・一糎。

内題、なし。

段数、五段。

刊記、後補の後表紙裏に貼付してある。

「右此本者依小子之懇望附秘密

音節自遂校合令開版者也

(壺印) (朱印)

(以下破損)

板元、山本九兵衛。

丁数、五十五丁。

行数、八行。

板心、「第二」の丁に㊶、「第三」の丁に㊷、「第四」の丁に㊸、「第五」の丁に㊹と、それぞれ上部にある。第三

十三丁裏に「舎」の板外あり。

備考、本書は、『近松門左衛門全集』、朝日版『近松全集』の底本である。その時には、奥書は破損していなかつ

たようで、加賀掾と山本九兵衛の名が記載されている。

右の書誌によって、東洋文庫本は、内題と本文末の刊記とを削り、板心などを補った後修本であることが明確になったと思う。更にその補修について述べると、本文や振り仮名の訂正、振り仮名の削除、節付けや区切り点の修正などがおこなわれている。本文などの訂正は、文法上の誤りを正したものなど三十ヶ所近くある。振り仮名については、煩雑さを避けたのか、百三十ヶ所ほど削除している。その中には、ごま章に替えたものもある。節付けなどの修正は、四十ヶ所ほどある。

次に、それらの補修ヶ所を原文と対照し、一覧表にして掲げてみよう。表中の当該箇所は、丁数・表裏・行数の順に記してある。

三

(一) 本文や振り仮名の訂正

番号	当該箇所	天理本	東洋文庫本
1	6	なりけり	なりけれ
2	1ウ 1	給ふとや	給ふとかや
3	6	応保元年	応保元年

4	4ウ 4	うごかさため	うごさなかため
5	5ウ 1	近衛院	近衛院
6	3 1オ	聞付おこし	聞付おこし

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
43ウ 2	5	39ウ 3	39オ 5	31オ 7	30ウ 4	20ウ 3	14オ 1	11ウ 6	11オ 7	10オ 6	9ウ 5
わだづみ	我又御跡つがん事	せられよとあれ共	かしまし〜	わだづみ	へだ、り	首 <small>くび</small>	其敵 <small>かたき</small> をを討 <small>うた</small> んため	空 <small>くう</small>	引 <small>ひ</small> しほ時	門 <small>もん</small> の内 <small>うち</small> につつと入	むもれ木の
わたづみ	我又其跡つがん事	せられよとあれば	かしまし〜	わたづみ	隔 <small>へだ</small> りたり	首 <small>くび</small>	其敵 <small>かたき</small> をを討 <small>うた</small> んため	空 <small>くう</small>	引 <small>ひ</small> しほ時	門 <small>もん</small> の内 <small>うち</small> まつつと入	むもれ木の

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
54ウ 4	54オ 4	53ウ 8	51ウ 2	50ウ 4	50オ 4	5	49ウ 2	47ウ 1	45オ 5	5
人をすくひ	四 <small>ちやう</small> たいを	一はちをさ、げつ、	かれ〜て	取 <small>と</small> らずして	ないしほんまつとう	仏心 <small>ぶつしん</small> をそなへたり	御戸 <small>みかど</small> びらき	あないさせて	かうないかぢをり	文をこせどの
人をすくひ	四 <small>ちやう</small> たいを	一はつをさ、げつ、	かれ〜て	取 <small>と</small> らずして	乃至本末恭敬 <small>こんけい</small> 等	仏心 <small>ぶつしん</small> にそなへたり	御戸 <small>みかど</small> ひらき	あないさせて	かうないかぢをり	文をこせとの

右の表には、東洋文庫本の印刷が悪いと判断される箇所、例えば第十五丁裏八行目の「大勢」の振り仮名の異同（天理本は「おほせい」は省略してある。1番の例は、天理本では「妙体無変の威徳こそあふくもおろか。なり

けり」となつて「こそ」の結びが誤つてゐるのを、訂正したものである。このような文法上の訂正が16・21番にも見られる。11番は、校正ミスの訂正と思われる。これは恐らく板下書きの誤りなのであろう。このような板下書きの書き誤りと思われるものに、2・4・5・12・13番がある。25番は、捨て仮名を削除しているが、取り除いた後に埋め木して、ごま章を付けている。27・28番は、それぞれ「一鉢」と「四諦」の読み誤りを正したものである。29番は、天理本で、「世をすくひ。人をすくひ」とあつたのに、「人をすくひ」とうっかり濁点をつけてしまったようで、この一ヶ所のみが改悪されてゐるのである。

(二) 振り仮名の削除

番号	1	2	3	4	5	6
当該箇所	オ 1	ウ 8	ウ 3	ウ 8	オ 3	3
天理本	鳴瀧	鳴瀧	柴に	鳴瀧	主君信房	刑部
東洋文庫本	鳴瀧	鳴瀧	柴に	鳴瀧	主君信房	刑部

12	11	10	9	8	7
2	1	ウ 1	7	7	4
源の憑	旁は	立寄て	驚き	俊仍	回国
源の憑	旁は	立寄て	驚き	俊仍	回国

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
21ウ 1	8	6	6	6	6	5	5	4	2	21オ 1	8	8
人畜生 じんちくじやう	人間 にんげん	恩をしらぬは おんをしらぬは	恩を見て おんをみて	命の親 いのちのおや	目前 もくぜん	仏 ほとけ	敵 たて	お僧は おそうは	今年 ことね	信武 のぶたけ	信房 のぶまき	返事 へんじ
人畜生 じんちくじやう	人間 にんげん	恩をしらぬは おんをしらぬは	恩を見て おんをみて	命の親 いのちのおや	目前 もくぜん	仏 ほとけ	敵 たて	お僧は おそうは	今年 ことね	信武 のぶたけ	信房 のぶまき	返事 へんじ

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
3	2	2	1	22オ 1	8	7	7	6	3	2	1	1
討ば うて	誓言 せいげん	名乗しなり なりのり	親の命に おやのいのち	侍る也 はんべる	源の憑 みなもと	有難や ありがた	合させ あは	俊苒 しゆんじやう	俊苒 しゆんじやう	武士 ぶし	敵よと かたき	殊に ことごと
討ば うて	誓言 せいげん	名乗しなり なりのり	親の命に おやのいのち	侍る也 はんべる	源の憑 みなもと	有難や ありがた	合させ あは	俊苒 しゆんじやう	俊苒 しゆんじやう	武士 ぶし	敵よと かたき	殊に ことごと



51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
6	3	3	2	2 <small>24ウ</small>	7	1 <small>24オ</small>	5	4	3	2	1 <small>22ウ</small>	6
望 <small>のぞ</small> にまかせ	甚 <small>はん</small>	奏 <small>そう</small> せらる	預 <small>あ</small> り	恐 <small>おそ</small> れながら	延 <small>ま</small> 引 <small>いん</small>	舍 <small>も</small> 利 <small>り</small>	旁 <small>かた</small>	極 <small>ごく</small> 楽 <small>らく</small>	死 <small>し</small> 人 <small>じん</small>	語 <small>かた</small> る <small>ち</small> べし	時 <small>じ</small> 刻 <small>こく</small>	討 <small>う</small> て
望 <small>のぞ</small> にまかせ	甚 <small>はん</small>	奏 <small>そう</small> せらる	預 <small>あ</small> り	恐 <small>おそ</small> れながら	延 <small>ま</small> 引 <small>いん</small>	舍 <small>も</small> 利 <small>り</small>	旁	極 <small>ごく</small> 楽 <small>らく</small>	死 <small>し</small> 人 <small>じん</small>	語 <small>かた</small> る <small>ち</small> べし	時 <small>じ</small> 刻 <small>こく</small>	討 <small>う</small> て

64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
7	5	5	5	2 <small>30ウ</small>	5	5	3	3 <small>30オ</small>	7 <small>29オ</small>	8	8	8
海 <small>うみ</small> へ	実 <small>じつ</small>	乗 <small>の</small> り <small>ま</small> べき	折 <small>ひ</small> 折 <small>せ</small>	有 <small>あ</small> り <small>ま</small> 増 <small>ま</small>	浜 <small>はま</small>	堺 <small>さかい</small>	底 <small>そこ</small>	俊 <small>しゅん</small> <small>せ</small> <small>ん</small> <small>ち</small> う <small>う</small>	座 <small>ざ</small> せる	御 <small>み</small> 法 <small>ぽう</small>	一 <small>い</small> 代 <small>だい</small>	世 <small>せ</small> 尊 <small>そん</small>
海へ	実	乗べき	折節	有増	浜	堺	底	俊 <small>しゅん</small> <small>せ</small> <small>ん</small> <small>ち</small> う <small>う</small>	座せる	御法	一代	世尊

77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65
34ウ 1	34オ 6	4	2	1	33ウ 1	8	7	7	6	3	33オ 2	7
主従 しゅじゆう	源の憑 なもと のたのび	八重 やま	信武 のぶたけ	肥後国 ひこのくに	主従 しゅじゆう	去年 こぞ	古御所 ふるごしよ	鳴瀧 なるたき	大内 おほうち	守彦 もりひこ	大和介 おほのすけ	乗入れよ のり
主従	源の憑	八重	信武	肥後国	主従	去年	古御所	鳴瀧	大内	守彦	大和介	乗入れよ

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78
36オ 3	5	4	4	3	1	35ウ 1	8	5	3	1	35オ 1	8
汝等 なんぢら	契りは せきは	討も うも	仏果 ぶつは	持参 ちさん	俊苜 しゅんじゆう	出家 しゅつげ	惣領 そうりやう	口論 こうろん	信武 のぶたけ	香花 かうげ	信武 のぶたけ	人体 じんたい
汝等	契りは	討も	仏果	持参	俊苜	出家	惣領	口論	信武	香花	信武	人体

103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
2	36ウ 1	8	8	8	7	6	6	6	6	4	3	3
俊 仍 <small>しゅんじょう</small>	信 房 <small>のぶみさ</small>	捨 <small>すて</small>	抜 <small>ひ</small> て	討 <small>う</small> やとて	参 <small>ま</small> 会 <small>かい</small>	本 <small>ほん</small> 望 <small>ぼう</small>	討 <small>う</small> れて	ごへん等 <small>らう</small>	源 <small>みなもと</small> の憑 <small>たのむ</small>	信 <small>のぶたけ</small> 武 <small>ぶ</small>	旁 <small>かたぐ</small> も	子 <small>し</small> 細 <small>ま</small>
俊 仍	信 房	捨	抜 て	討 やとて	参 会	本 望	討 れて	ごへん等	源 の憑	信 武	旁 も	子 細

116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104
4	4	4	4	3	3	37オ 2	8	8	5	4	3	3
出 家 <small>しゅつけ</small>	惣 領 <small>そうりやう</small>	御 存 <small>ごんじ</small> のごとく	聞 分 <small>きわけ</small> て	望 <small>のぞみ</small> あり	道 <small>ぢ</small>	御 所 <small>ごしよん</small> 存	御 心 <small>ごしん</small> 底 <small>てい</small>	御 参 <small>ごんけん</small> 詣 <small>げい</small>	侍 <small>まゐらひ</small>	忘 <small>わす</small> れたるか	誓 <small>せいの</small> 言 <small>ごん</small>	敵 <small>かたき</small>
出 家	惣 領	御 存 の ご と く	聞 分 て	望 あ り	道	御 所 存	御 心 底	御 参 詣	侍	忘 れ た る か	誓 言	敵

122	121	120	119	118	117
46ウ 4	46オ 2	8	6	2	37ウ 2
土うんだり	泉浦寺	信房	信房	兎も角も	御了簡
土うんだり	泉浦寺	信房	信房	兎も角も	御了簡

128	127	126	125	124	123
32オ 8	30オ 8	49オ 3	47オ 5	7	6
五音	五輪は	今生みんぐは	泉浦寺	俊苜	忍びず
五音	五輪は	今生みんぐは	泉浦寺	俊苜	忍びず

この表から知られるように、振り仮名を削除した箇所は、百三十ヶ所ほどある。振り仮名は節付けやごま章の間にあり、誠に巧妙に彫刻されているのである。それをこれほどまでに削り取ったのは何故であろうか。単に多すぎるからという理由だけではないのである。一度振り仮名をつけた漢字は、後は極力省略しようである。また、殊更に振るまでもない漢字も削除しようである。しかし、そのことによって、文字がわかりにくくなったものがある。例えば、3番の「柴に」であるが、この「柴」という漢字は、他の漢字と比べると、「此等」とも読める字形になっているので、振り仮名を取られたことで、かえってわかりにくくなっているのである。この例ほどではないが、付されていた方がよかったものに、114番がある。

削除をしなければ仕方がなかったと考えられるものに84番がある。これは、節付けの訂正のために埋め木するには狭すぎるので、振り仮名が取り除かれたのであろう。

73・74番は、後でごま章に替えている。なお、71番は、恐らく、振り仮名を削る時にうっかり「ぞ」のごま章まで取ってしまった、後で「こ」のごま章を加えて直したものであろう。

最後に一部削り忘れがある例を紹介しておく。それは80番である。振り仮名の「かうげ」を削り取る際、「げ」の濁点を忘れたようで、それが東洋文庫本に残っているのである。

(三)節付けや区切り点の修正

番号	当談	天理本	東洋文庫本
1	1オ7	帝をば。二条ノ院	帝をば二条ノ院
2	6オ5	ける。	ける。
3	7ウ2	其ねこ	其ねこ
4	8オ1	鳴瀧も	鳴瀧も
5	13オ8	信房	信房
6	23オ8	よき女の	よき女の
7	23ウ8	やうもなく	やうもなく

8	24オ4	かゝる所へ	かゝる所へ
9	25オ1	むかふば	むかふば
10	26ウ2	おいとま	おいとま
11		俊仍	俊仍
12	28ウ1	つきすへたり	つきすへたり
13	31ウ3	て。あゆまする	てあゆまする
14	33オ8	去年	去年

浄瑠璃本の補修について

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
48才 4	5	46ウ 1	46才 7	45才 3	44才 6	43才 6	41才 3	38才 7	35ウ 1	8	4	2	33ウ 1
此。俊 <small>しゆんじゆう</small> 仍 <small>もち</small>	おかされて	せん <small>せん</small> ゆうじ	はだ <small>はだ</small> ゑ	つきじまの。いる <small>い</small> さ	まねくか	いくつと	姫君は	立空の。雲井丸 <small>うんせいまる</small>	出家 <small>しゅっけ</small>	やれ是こそは	八重 <small>やゑ</small>	信武 <small>のぶたけ</small>	肥後国 <small>ひごのくに</small>
此俊仍 <small>しゆんじゆうもち</small>	おかされて	。せん <small>せん</small> ゆうじ	はだ <small>はだ</small> ゑ	つきじまのいる <small>い</small> さ	まねくか	いくつと	姫君は	立空の雲井丸 <small>うんせいまる</small>	出家 <small>しゅっけ</small>	やれ是こそは	八重 <small>やゑ</small>	信武 <small>のぶたけ</small>	肥後国 <small>ひごのくに</small>

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
55才 4	8	51才 8	4	53才 3	51ウ 4	50才 2	8	49ウ 2	49才 3	7	7	48ウ 5	8
一味の雨は	さとりをひらく	けり。是 <small>これ</small> や	あて。あ <small>あ</small> ら	かりける。はげみ也	水みへず	しやうもん	扱 <small>あつか</small> こそ	ずいきする所に	御 <small>ご</small> しめしや候。今 <small>いま</small>	一切	親 <small>おや</small> 有 <small>あ</small> て	けち <small>ち</small> ゑんたり	まつ其 <small>その</small>
一味 <small>いっ</small> の雨 <small>う</small> は	さ <small>さ</small> とりをひらく	けり是 <small>これ</small> や	あてあ <small>あ</small> ら	かりけるはげみ也	水 <small>み</small> みへず	しやうもん	扱 <small>あつか</small> こそ	ずいきする所に	御 <small>ご</small> しめしや候今 <small>いま</small>	一 <small>いっ</small> 切	親 <small>おや</small> 有 <small>あ</small> て	けち <small>ち</small> ゑんたり	まつ其 <small>その</small>

右の表を整理すると次のようになる。

- (1) 節付けを削除したもの。  
4・9・23 (ごま章)・35
- (2) 節付けを追加したもの。  
1・2・5・11・12・14 (ごま章)・15 (ごま章)・16 (ごま章)・17・18 (ごま章)・19・21・25・32
- (3) 節付けを替えたもの。  
3・8・31 (位置も替える)・34
- (4) 節付けの位置を替えたもの。  
6・7・10・20・22 (ごま章)・27・29・30・36
- (5) 句切り点を削除したもの。  
1・13・20・24・28・33・38・39・40
- (6) 句切り点を追加したもの。

26

節付けや区切り点などを詳細に修正していることが、これで明確になったものと思う。これらの修正は、恐らく宇治加賀掾によってなされたものであろう。加賀掾は、謡本のように曲節をつけた八行本を最初に出版した人といわれている<sup>④</sup>。また、延宝九(天和元)年六月に段物集の『大竹集』を出版した際、自ら「加賀掾校合」とわざわざ署名していることを考えると、出版時における彼の配慮は並々ならぬものがあつたことが推測される。従つて、どのような事情があつたか不明であるが、加賀掾としては不満足な『舍利』が出版されてしまったので、それを後に彼自身が補

訂したものと思われる。修正された曲節などがどのような意味と音楽的效果を示すのか、また、作者は一体誰なのか、などについては今後の課題である。

四

前述した通り、東洋文庫本は天理図書館本の後修本である。そこで次に両本の版面の寸法を対照し、一覧表にして掲げてみよう。寸法は、各丁表の最終行の字高で、センチメートルである。表中、※印は最終行が文字よりも曲節の方が高いのでそれを測ったもので、△印は刷りが悪いもの、×印は紙にしみがあると思われるものである。

丁数	(A)天理本	(B)東洋文庫本	差(A)―(B)
11	一九・七	一九・四	〇・三
10	一九・九	一九・五五	〇・三五
9	一九・八	一九・五	〇・三
8	一九・七	一九・三五	〇・三五
7	一九・七	一九・四	〇・三
6	一九・八	一九・四五	〇・三五
5	一九・五	一九・三	〇・二
4	一九・八	一九・五	〇・三
3	一九・五	一九・一	〇・四
2	※二〇・〇	※△一九・三	〇・七
1	一九・五	一九・一	〇・四

22	一九・六	一九・一	〇・五
21	一九・八	一九・五	〇・三
20	二〇・〇	一九・八	〇・二
19	一九・六	△一九・二	〇・四
18	※一九・八	※一九・五	〇・三
17	一九・七	一九・四五	〇・二五
16	一九・七	一九・四	〇・三
15	一九・八	一九・四五	〇・三五
14	一九・九五	一九・五五	〇・四
13	二〇・一	一九・六	〇・五
12	一九・九	一九・六	〇・三



浄瑠璃本の補修について

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
一九・八	一九・六五	一九・九	一九・五	※ 一九・六	一九・六	一九・三五	一九・八	一九・九	一九・八	一九・七五	一九・五五	一九・八	一九・八	一九・五五	一九・七	一九・七五	二〇・〇
一九・三五	一九・二	一九・五	一九・一	※ 一九・二	一九・二	一九・〇五	一九・二	一九・五五	一九・五	一九・四五	一九・一	一九・四	一九・五	一九・三五	一九・四	一九・四五	一九・七五
〇・四五	〇・四五	〇・四	〇・四	〇・四	〇・四	〇・三	〇・六	〇・三五	〇・三	〇・三	〇・四五	〇・四	〇・三	〇・二	〇・三	〇・三	〇・二五

55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
一九・七五	一九・九	※ 二〇・五	一九・八	一九・六五	一九・七	一九・九	一九・七	※ 二〇・二	一九・九	一九・八	一九・七	※ 一九・三	二〇・〇	一九・七五
注 一九・一五	一九・五五	※× 二〇・〇	× 一九・三	× 一九・〇	× 一九・五	× 一九・二	一九・三	※ 一九・七	一九・四五	× 一九・三	× 一九・四	※× 一八・九五	一九・五五	一九・四
〇・六	〇・三五	〇・五	〇・五	〇・六五	〇・二	〇・七	〇・四	〇・五	〇・四五	〇・五	〇・三	〇・三五	〇・四五	〇・三五

右の表中、「注」とした東洋文庫本の五十五丁目は、裏打ちしてあるところである。

さて、両本の字高を比較すると、○・二一〇・七センチの差があることが知られる。表中△×印については除外してその差を平均すると、後修本である東洋文庫本の方が、約○・三五センチ縮んでいることがわかるのである。

従来、覆刻版は版面がわずかに縮少することが知られている。より多くの資料によって判断しなければならないが、一応、『舍利』の例から知られるように、後刷り本も縮少することを述べておきたい。

## 注

① 最近では、『正本近松全集』第二十四卷（勉誠社、昭和五十九年十月刊）に影印され、鳥居フミ子氏が解題でそのことを述べておられる。

② 『古浄瑠璃集 加賀掾正本一』（古典文庫、昭和四十三年七月刊）一八九―一九〇ページ。

③ 『加賀掾段物集』（古典文庫、昭和三十三年七月刊）二七二―二七三ページ。

④ 『今昔操年代記』には、次のように記されている。

加賀掾宇治好澄かんのせう ちよすみとあらためしより。町中いよく此流このりゆうをかたり出し。あまつさへけいこ本八行ほんはちぎょうを。四条小橋よしかわつばやといへるに板行いたんさせ。浄るり本に謡うたのごとくフシ章しやうをさしはじめしは此太夫ぞかし。

⑤ 例えば、『古活字本の印刷技術』（『ピブリア』二二号、昭和三十七年三月）の中で、そのことが述べられている。

## 付記

本稿作成にあたり、信多純一氏、大橋正叔氏に御教示を賜りました。記して深謝申し上げます。